

---

# 魔法少女リリカルなのは ～ I F の存在～

snow

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～IFの存在～

### 【Nコード】

N8197Q

### 【作者名】

snow

### 【あらすじ】

一人の少年は世界から姿を消した。

そして彼は、とある管理外世界にたどり着く。本来ならば存在しない筈の彼はどんな物語を紡ぐのか・・・

リリカルなのはにオリキャラを加えた二次小説です。  
処女作なので長い目で見て頂けると幸いです。

## ブローグ

彼は時空管理局に所属している執務官だった。

時空管理局とは簡単に説明すると、次元世界、様々な世界を管理・維持している軍隊・警察・裁判所の3つが統合された機関の事だ。その中で「魔法」を使うことが出来る人間がいた。そういう人間のことを「魔導師」と呼んだ。だが才能の差があり、強大な魔力を持つものもいれば、欠片も持たない人間もいる。持っている人がいる多くの世界は管理世界とされる事が多く、持っていない人間がほとんど、生物自体がない等の多くの世界は管理外世界とされることが多かった。

管理局の主な活動は、犯罪者の逮捕、管理世界の運営、維持。そして技術の発展により自滅の道を辿った世界が残っていた旧文明の遺産「ロストロギア」の管理である。ロストロギアは使い方がわからず、危険な物で世界そのものを消し去ってしまう様なものも数多くある。だから、ロストロギアに関しては基本的に未干渉としている管理外世界に干渉する事も少なくない。

執務官とは事件発生時の捜査・指揮・法の執行を行う管理職のことだ。「所属部署における事件および法務案件の統括担当者」となる。法務知識を中心に多様な知識や技術が必要であり、資格試験は特に難易度が高い。

彼はその中で天才というわけでは無いが、13歳で執務官となる事は並大抵のことではない。魔導師ランクはA+（中の中程度）だったが、Sランクの犯罪者を捕まえた事もあるなど優秀な執務官だった。

そして、その日は管理外世界でロストロギアを封印し回収するだけの、彼にとっては簡単任務だった。

．．．．そのはずだった

封印したはずのロストロギアが暴走を始め光が彼を飲み込んだ。収まった時、そこには人影もなにも無かった。

そして飛ばされた彼は、とある管理外世界にたどり着いた。本来存在しないはずの彼はいったいどんな物語を紡ぐのか。

魔法少女リリカルなのは　＼ＩＦの存在＼　始まります。

## プロローグ（後書き）

感想、意見、ご指摘がありましたら遠慮なく送っていただけると幸いです。

## 第一話 知らない天井？（前書き）

修正しました。

## 第一話 知らない天井？

「知らない天井だ．．．」

と冗談はここまでにして此処ホントに何処だろう。封印したはずのロストログアの暴走に巻き込まれたのは覚えているんだけど．．．時空管理局でも無さそうだし、次元漂流して管理外世界に流れ着いたってのが妥当な所だ。

とりあえず現状の確認をしよう。

「起きてるんだろ。」

「よく分かりましたねマスター。」

マスターと呼んだこいつはオレのインテリジェントデバイス、アルだ。今は待機しているからカード状になってる。

「あたりまえだろ、早速で悪いんだがオレの体のスキャンをたのむ。」

「了解。スキャン開始」

何も異常が無いといいんだけど、そうはいかないだろう。ロストログアの暴走に巻き込まれたんだから。

「．．．！？ スキャン終了。」

アルは驚き隠せないといった様子だ。

よっぽど深刻な事なんだろうか？

「結果をまとめると、外傷は打撲と擦り傷程度で問題ありません。リンカーコアも正常稼働している様なんですが・・・」

「言ってくれ。」

「・・・了解。マスターのリンカーコアとロストロギアが融合しています。不完全な融合の様ですが魔力ランクはS程度まで上がっていると思われます。」

「・・・ちょ！？オレと融合！まあ、魔力が高くなったのはいいが、どんなデメリットがあるか分かったもんじゃない！ロストロギアとの融合例は確かにあるが、人体に悪影響を起こしていない事例はほとんど無いに等しい。」

「それとマスターの体内でリンカーコアとは別の機関が活性化します。リンカーコアがタンクだとしたら回路の様な物の様です。」

回路の様な物？なんなのだろう？不安だ。

「！？何だこれ！！頭の中に何かが！」

「マスター！？」

なんだこれ！オレの知らない知識が流れ込んでくる！クソ、ロストロギアの影響か！

尋常じゃない量の情報が頭の中に流れ込んでくる。見た事のない術式、構成、能力と絶え間なく頭の中に流れ込んできた。

オレの頭がパンクする前になんとかリンクを切ることが出来たのは幸いだろう。

「はあ、はあ。」

「大丈夫ですか！マスター！」

「・・・もう大丈夫だ、心配かけたな。どうもロストロギアから知識が流れ込んだみたいでな。そうなる様にインプットしてあったんだろう。」

「ロストロギアから！？・・・どんな知識なんですか？」

「ああ。まず、このロストロギアの名称はコード01とかいうらしい。試作品だから形式番号しかないみたいだ。そしてその能力は人の願望を叶える事、無限の可能性の中からifを具現化させるために作られた様だ。まあ、結局完成しなかったみたいだが。」

ま、それだけじゃないみたいなんだけど、あれ以上理解しようとしたらオレの頭が持たないだろう。

「無限の可能性？ifを具現化？」

「例えば、今、オレの体で活性化しているもの。これはとあるアニメなどの作品にでてくる魔術回路と呼ばれるものに酷似してるんだ。まあ、これもロストロギアからの知識のお陰なんだが。」

「そんな！？そんなことある筈が！？」

「ああオレもそう思う、そんな事ある筈がない。でも、もしそれが何処かの世界に存在するとしたら？ 可能性は0じゃないし、誰にも無いなんて証明できない。だから、使用者が願うその可能性が1%でも何処かにあればそれを具現化させる事が出来る。それがこのコード01の能力だ。オレのリンカーコアの増大もたぶんその効果だろう。」

アルは驚いてる。オレだってびっくりだけど直接頭の叩き込まれたら納得するしかない。

それに本当にあった物を模倣してアニメを作ったのかもしれないしな。

「・・・では、そのコード01を使えばどこかにその可能性さえあれば何でも具現化出来るし、願えば誰でも魔道士になれるということですか？」

「いや、それは無理みたいだ。限界はあるみたいだし、完全にさっきので機能停止してる。再起動出来るかも分からない。これに適合しなかったら死ぬみたいだしな。それにもし、完成しているんなら、あんな場所には置かれてないだろう。」

ホント適合してて良かった。

「分かりました。マスターの言うことですから間違いないのでしょう。で、その魔術回路とやらに酷似したものはどのような事が出来るのですか？それに、完成してないのなら何故それが発動を？」

「ああ、それはな！？」

「アル誰か来る、この話は後だ待機状態に戻れ！」

ちょうどドアが開いた。危ない所だった、管理外世界でデバイスを見られるわけにはいけないからな。

「目が覚めたみたいだな。娘が君を連れてきた時はおどろいたよ。」

若い男の人だ。どうもこの人のお子さんに迷惑をかけた様だ。それにしても、この人只者じゃない。

「迷惑をお掛けしてしまつてすみません。それとありがとうございます。」

「礼なら娘に言ってくれ、オレは何もしてないからな。今、娘を連れてくるから少し待っていてくれ。」

そういつて部屋から出て行つて数分後、オレを助けてくれたのであろう女の子と一緒に戻ってきた。

「自己紹介がまだだったな。オレの名前は高町士郎だ。こつちが娘のなのはだ。よろしくな。」

「オレは不破リョウトです、よろしく願いします。」

「なんだと!？」

あれ士郎さんの反応がおかしい。変な事いつたか？

「いやすまない。リョウト君親は?」

「5年前に拾われたのですがそれより前の事は殆ど覚えていな

いので両親の事は分かりません。育ててくれた人も、もうこの世にはいませんし。名前は不破と書かれているネームプレートを付けていたのと、リヨウトという名前は覚えていたのでそこから。」

士郎さんは申し訳無さそうな顔していった。

「悪かった。無神経な事を言ったな。」

「いえ別に気にしてませんから。」

「そうか。聞きたい事は他にもあるが、なのはが話をしたいそうだから、また後でな。」

そういつて士郎さんは部屋を出て行った。当然部屋にはなのはちゃんと二人になったわけだが・・・気まずい、向こうが黙っているのでこっちから話しかけるしかないだろう。

「なのはちゃんでもよかったよね？ありがとう、オレをここまで運んでくれて。」

そういうと、なのはちゃんはいきなり頭を下げた謝ってきた。

「すみません！私のせいかもしれないんです！」

「どういうこと？」

流石に理由聞かないと訳分らない。  
それにオレにも原因があった。

「あの信じてもらえ無いかもしれないんですけど、私魔法が使える

んです。」

「ここ管理外世界じゃなかったの？と、思っていたらいきなりフェレットがなのはちゃんの後ろから出てきた。」

「僕がその証拠です。始めましてユーノ・スクライアです。」

「使い魔なんて使ってるんだ。じゃ結構素質の高い魔道士なのか？  
．．．ちよつと待て、スクライアだと？」

「スクライアって事は。あの遺跡発掘とかしてる民族の子か。それがあの有名なスクライアの変身魔法つか。」

「ホントにスクライアは動物に変身するんだ。ただの噂じゃなかったんだな。」

「！？あなたは何者ですか？」

「ああ、オレは時空管理局 執務官 不破リョウトだ。」

「管理局！？」

「ああ、悪かったなバリアジャケットを解き忘れてた。今解くよ。  
で、さっきの話の続きを頼む。」

「バリアジャケット発動してたの気づかなかった。まあ、無意識で維持してたんだろ。それとは関係ないが動物相手に話すってへんな気分だな。」

「変身魔法なんで解いてればいいのに。」

「はい。僕は遺跡発掘をしていてあるロストログアを発掘しました。名前はジュエルシードといって、使用者の願いを歪な形で叶えてしまう危険なものです。それが輸送中に何者かに襲われ、21個のジュエルシードがこの第97管理外世界地球のここ海鳴市に落ちてしまったんです。それで、僕が回収しに来たんですけど、怪我をして動けなくなった所をなのはに助けられ、襲ってきたジュエルシードの異相体をなのはに、デバイス、レイジングハートを使って封印してもらったんです。その後もなのはに協力してもらっています。」

馬鹿な、一人で回収しに来たなんて、何で管理局に連絡を入れない？責任感が強いのは分かった。だが、無謀でもある。

誰かのセリフと被った気がするが気のせいだろう。

「ここからは私が話すよ、ユーノ君。昨日回収している時に発動したジュエルシードが暴走しかけちゃって、それが、収まった時にあなたがそこに倒れていたんです。だからもしかしたら私が巻き込んでしまったのかもしれないんです。」

「違うよなのは。悪いのは僕だよ。僕が早く管理局に知らせなかったから……。」

なのはちゃんは涙を浮かべている。まったくなんでこの子達はこんなに責任感が強くて大人びているんだろう？まだ親に甘えていた年頃の筈なのにな。

「君達の事情は分かったよ。オレは、なのはちゃん達が悪かったとは思ってないよ。」

たぶん原因はオレにもある。

そう言おうと思ったが、それはまた後にしよう。混乱させたく無いしな。

「どうしてですか？私が巻き込んだのかもしれないのに。」

「うーん、まずユーノの事だけど確かに管理局を頼らなかったことや、なのはちゃんを巻き込んだことは確かにいい事じゃない。そしてなのはちゃんは確かにオレを巻き込んだのかもしれない。」

「だったら!？」

「話は最後まで聞こう。ユーノ達は責任を感じて行動していたんだろう？その思いは間違っていないし、悪くもない。立派なことだ。なのはちゃんだって暴走させたかったわけじゃないし、巻き込みたかった訳じゃないだろう？事故だったのなら仕方ないし、君達は反省してるみたいだしな。それにまだ君達の所為と決まった訳じゃないんだ。」

「でも!」

まったく何なんだこの子達は。まるで、迷惑かける事は絶対に駄目だとも思っているのか。

オレはそう感じた。

「でもない。そうだな、オレに悪いと思うんだったらオレから一つ頼みごとをしようかな？」

「頼みごと？どんな事ですか？」

「難しい事じゃない。もつと人を頼る事を覚えろ。迷惑掛けたくないことは分かる、でもそれで何かあったら悲しむ人達がいる事を忘れないでくれ。」

何か大変な事を頼まれると思っていたのかポカンとしている。まったく子どもに大変な事なんて頼むわけがない。

「それにな辛い時は我慢するな？泣いても誰も怒らないし、迷惑にも思わない。誰だつて泣くことぐらいあるんだからな。そんなに良い子であろうとしなくても良いんだ。」

そういつて、オレは笑つて二人の頭を撫でた。

少しの間耐えていたがなのはちゃんはおれに抱きついて、泣き始めた。今まで我慢して、迷惑を掛けない様にしてきたんだろうな。その気持ちはオレにも良く分かる。

だから、好きなだけ泣かせてあげよう。そして、泣き終わったら話すしよう。オレが此処に来てしまったもう一つの原因を。

## 第一話 知らない天井？（後書き）

原作と、性格、口調が変わっていますが気にしない方向でお願いします。

劇場版設定も入れていくつもりです。

後、「」は念話です。

## 第二話 確認そして協力

なのはちゃんはまだ泣き終わったみたいだな。

「落ち着いた？」

「す、すみません／＼」

「謝らなくていいよ、迷惑だなんて思っていないから。じゃ、次はオレの話しだな。」

「リョウトさんの話し？」

「そうだ。オレが君に巻き込まれたのは半分正解なんだと思う。だけどな、もうたぶん半分はオレの所為なんだ。」

「え？」

さて何処まで話そうかな？とりあえず、魔術回路の様な物（以降魔術回路）についてと体内のロストロギアについては黙ってこう。

「オレはロストロギアを回収しようとしていた、その名はコード01という。」

「コード01？」

「封印処理をして帰ろうとした時だった。封印したはずのロストロギアが暴走して気がついたらオレは此処にいた。」

よし今度はちゃんと聞いてくれているな。

「このロストログアはジュエルシードと似ていてな？人の願望を叶えることが出来るんだ。オレはこう思っていた。こんな任務なんかじゃなくてもっとたくさんの人を助けたい。ってな。たぶんそのせいなんだろう、コード01は世界中からオレが助ける事が出来る人と場所を探した。そのとき、同じ様に願いを叶えるジュエルシードと共鳴したんだろう。ちょうど良かったってやつだな。」

でもたぶんそれだけじゃないんだろう。助けを求めている人なんて世界中にたくさんいる。なのはちゃんの所に来たのはジュエルシードと共鳴したからだろう。一応それで納得は出来る。でも、封印は完璧だったはずだ。このロストログアはオレが思っているよりやばいかもしれない。

「そうなんですか。そのコード01はどうなったんですか？また発動する危険は？」

「もしまた発動しちゃったら・・・。」

「大丈夫だ。心配するなユーノ、なのはちゃん。完全に機能停止しているし何重にも封印をかけたからな。」

「よかった」

この子達はホントにいい子だな。心からそう思っている事がよく分かる。

「よし決めた。オレもジュエルシード集め手伝うよ。管理局員だしな。それとユーノ、管理局に連絡を取ってくれないか？」

「協力ありがとうございます！それから今やってみます。」

これで連絡が取ればいいんだけど。

「！．．．おかしいな。管理局どころかこの世界から外に連絡がとれない。」

「やっぱりか。たぶん共鳴の所為で次元震が起きてこの辺りの次元が不安定になっているんだろう。時間が経てば元に戻ると思うけど、それまではオレ達だけで探すとするか。」

「でも、迷惑掛けちゃうし、フエイトちゃんの事だつてあるし。」

まだなのはちゃんは納得いかないみたいだ。それよりも、フエイトちゃん？

「僕達の他にジュエルシードを探している魔道士がいるんです。それもかなり強くて、使い魔もいっしょです。その子と戦って封印を同時に掛けたときにジュエルシードが暴走しかけました。」

補足ありがとうユーノ。でも、手練れの魔道士か厄介だな。

「なんで集めてるのか聞こうと思ってお話ししようとしたんですけど全然聞いてもらえなくて。それに寂しそうな目をしてる理由も。」

「そうか、話し合いで解決するんだつたらそれが一番良い。その子と出会ったら話し合いを持ちかける。断られたら捕縛して話を聞かせてもらう。これで良いか？後、ジュエルシードはオレが預かるから、管理局員だし。」

「・・・分かりました。よろしくお願いします。」

「心配するな、なのはちゃん。迷惑だなんて思っただけに、オレは君達に怪我とかしてもらいたくないからな。」

オレは笑顔でいった。この子達を助けたいそれは管理局員としてだけでは無く紛れも無いオレ個人の本心だから。

「っ／＼そ、そういえばリョウトさんのデバイスは？後、なのはちゃんじゃなくて、なのはでいいですよ。」

なのはちゃん、じゃなくて、なのはは何で顔が赤くなってるんだろ？ま、いいか。

オレはカードの形をしたデバイスを出した。

「こいつがオレのデバイス、アルだ。じゃあ、オレもアルも敬語じゃなくていいからな、むしろしないでほしい。」

「初めまして、アルです。これからよろしくお願いします。」

「分かりま、分かった。よろしくね、アル。」

「よろしく、アル。」

「なのはのデバイスは？」

「レイジングハートです。これからよろしくお願いします。」

赤い宝石が点滅している。良いデバイスみたいだな。

「ああ、こつちこそよろしくな。」

さて、これで当面の行動は決まったな。でもまだまだ問題がありそうだな。雰囲気からしてまず、なのはの両親は魔法について知らないのだろうな。今のオレは金も無いし住む家も無いし。なのは達の実力も知らないからな。それに魔術回路の事だつてある。前途多難だ。でも、とりあえず今は・・・

「悪い疲れた。少し寝かせてくれ。」

寝るとしよう。

## 第二話 確認そして協力（後書き）

自分の文才の無さが良く分かりました・・・

拙い文章ですが宜しく願います。

### 第三話 命の危機？（前書き）

少し書き方を変えてみました。

### 第三話 命の危機？

いつの間にか夕方になっていた。

なのはの家族に説明しなくちゃな。

「マスター、もう大丈夫なのですか？」

「ああ問題ない。魔術回路についてだが、先になのはのご家族に魔法の事とオレの事について説明しようと思う。問題ないか？後、魔法使う事になるがだいじょうぶか？」

「問題ありません。ただ自動修復を掛けていますが損傷が激しい部分があり武器として使うには問題ありませんが、魔法を使うのは1、2回が限度でしょう」

まあそれはしょうがないだろう。一応ロストログアの暴走にまきこまれたんだからな。最悪オレだけでも魔法は一応使えるから問題ないだろう。

「よし、じゃ行くぞ。」

「了解。」

なのは side

ホントに良かった、怪我も無いみたいだし。管理局の人っていう

のは驚いたけど。でも人前で泣いたのなんて何時振りだろう？それに話してる時は気づかなかったけど、ずっと気を遣ってくれてたみたいだし、優しい人だな。

「それにあの笑顔は反則だよ／＼／」

突然喋りだして赤くなるなんて、はたから見たら不思議な光景だろう。

でも、執務官って言ってたけどどのくらい強いんだろう？どんな魔法を使うのとか聞いてないし。うん、リョウト君が起きたらまたお話しよう。でも問題はそこじゃない。一番の問題は・・・

「どうやってお父さん達に説明しよう？リョウト君が起きるまで待ってくれてるけど。」

そんな事を考えていると、いつの間にか夕方になっていて道場の方から音が聞こえてきた。

「まさか！早く止めないと！」

わたしは急いで道場に向かった。

ユーノside

スクライアの事を知ってるなんて、何者かと思ったけど管理局だったのなら当たり前だ。というかなんでバリアジャケットを着ていたの気づかなかったのだろう。それはさておき執務官なら経験も

多いだろうし、あのフェイトっていう魔道士が相手でも、なんとかなるだろう。

でもおかしい。あの管理局の制服今の型じゃない、あれは古い型だ。10年も前に変わってるんだから、まだ変えていないっていうのもおかしい。そもそもリョウトさんは10年前に管理局に入っているはずが無い。ユーノは疑問に思ったが、すぐにそんな考えを振り払った。

そんな事を考えているともう夕方だ。なのはが何か言っていたので聞こうと思うと血相を変えて部屋から飛び出していった。

なにかあったのかな？もしかしたら、何かまずいことでもあったのかもしれない。

僕も後を追いかけた。

でも、まさかあんな事になっているなんて思いもしなかった。

リョウト side

リビングらしき所まで行くと、道場の方に来るように置手紙があった。

「なんか嫌な感じしかないんだけど。」

しょうがない道場まで行こう。オレは、家を出て庭先にある道場に足を運んだ。

道場の中に入ると士郎さんが話しかけてきた。

「やっと来たな。？格好がさっきと違うみたいだがまあいいか。」

なんか殺気らしきもの出されてるんだけど。正直訳が分からない。  
何か不味い事でもしちゃったかな？

「君との实力を見たくてな、構えろ。」

そんな事を考えているといきなり木刀渡された。

構えろとか言われても訳が分からない。

「なにを呆けている。早く構えろ。」

「なんでですか！戦いたい意味がわかんないんですけど！？」

「今は分からなくてもいい。いくぞ、本気でこい。永全不動八門一  
派・御神真刀流小太刀二刀術 師範 高町士郎 参る！」

問答無用で、来るようだ。魔法を使う事になるがこれから説明するつもりだったのでちょうど良いだろう。

「アル、セットアップ！」

その言葉と同時にオレの服装は黒いコートと黒いズボンのバリア  
ジャケット（以降BJ）に変わり、オレの左手には木刀右手には機  
械的な杖を持っていた。そして、オレはバインドを放った。

「フープバインド！」

これで終わりだろう。そう思っていたんだけどバインドが青く光った瞬間に士郎さんは避けた。バインドが発動しきる前に避けるなんて魔導師でもないのに有り得ない筈だ。士郎さんはそのまま攻撃してきた。いくらなんでも動きが速すぎる！こんな事を考えてる場合じゃない。

士郎さんの一撃をなんとか避けた。こういう人を相手にするのは初めてじゃないし防御に徹すれば耐えるくらいは出来るはず。後は隙を見つけて攻撃するしかないだろう。

だがオレはいきなりバランスを崩した。否、崩されたのだ。

士郎さんは足払いを掛け手きた。今回は耐えられたが、不味いこれ以上攻撃パターンを増やされたら耐え切れなくなる。アルは後一度しか魔法を使えないし、負担の大きい砲撃などは無理だろう。アル無しじゃないした魔法は使えない、誘導弾も叩き落とされるだろう。

ならどうにかしてバインドを当てるしかない！

士郎 side

なんだ！？いきなり光ったかと思えば、服がさっきの物に戻っているし、右手に杖の様な物はどこに持っていたんだ？まあ、HGSの事もあるからそれほど驚きはしないし、今考えるべきはそこじゃない。

問題は、さつきリョウト君が使った謎の光の輪だ。何とか気づいて避けられたが、あと少し遅かったら捕縛されていたんだろう。まさか神速を使う事になるとは思わなかった。だが何時までもそんな事を考えても仕方が無い。

それに、近接戦闘はそれほどでは無いみたいだから、パターンを増やせば対応しきれないだろうと思っていたが、なにか心得はあるみたいだ。さつきの足払いから持ち直してなにか仕掛けて来る様だ。面白い、だったらオレも少し本気を出すでしょう。

君は本当にオレの知っている不破遼斗なのか。そしてなのは守れるほどの力があるのか見極めさせてもらう！

リョウト side

士郎さんの木刀が次々と繰り出されてくる。オレが隙を見つけて攻めに出ようとした瞬間、士郎さんの動きがさらに速くなった。さつきはまだ手を抜いていた様だ。けどこのまま普通にバインドを使っただんじゃ避けられる。だったら、避けられないようにするしかないだろう。

オレは左の木刀を投げて怯まそうとしたが、避けられた。そう簡単には当たってくれない様だ。

しかも、これでオレの武器はアルしか無くなった。

「どうした？お前の力はこの程度か！」

「くっ！？手が！？」

木刀を受け止めた瞬間とてつもない衝撃が伝わってきてアルを落

としそうになってしまった。

手に力が入らない。恭也さん追撃が来る！やばい！　オレは咄嗟にアルで受け止めた。いや、受け止めたはずだった。

「なっ！？ぐあっ！」

士郎さんの一撃はアルをすり抜けオレの腹部に直撃した。どうやら相手の防御を抜く技のようだ。冷静に考えてはいるが、不味い状況な事には代わりが無い。

BJのお陰でダメージはほとんど無いがさっきの衝撃がくるのを食らったら終わりだろう。木刀も投げてしまったし、もうアルが使えない今は碌な魔法を使えない。だが手が無い訳じゃない！

「ステインガレー！」

士郎さんは驚いたが直射弾を叩き落とした。そのまま次の攻撃が繰り出される。アルを使つてないとはいえ有り得ない反応速度で士郎さんは反応している。

「まさか、もろに直撃して倒れないとはな。それにこの光る球、こんな物まで使えるなんて。だが万策尽きたようだな、次で決める。」

ああ確かに普通ならもう終わりだろう。だけどオレはこれ待ってたんだ！一番油断するこのタイミングを！

士郎さんの木刀が迫る。今だ！

「BJバースト！」

「なっ！」

B」を木刀が当たった瞬間に爆発させ土郎さんの武器を一つ奪った。だけどこれで終わりじゃない！

「ステインガレー！」

土郎さんを両側から2つの青い誘導弾が狙い打つ。

アル無しでは精度が悪く数も出せないが問題ないだろう。

「くっ！」

土郎さんは捌くのは無理だと判断し後方に跳んだ。予想通りだ。

「だがこの程度で！」

「いえ、あなたの負けだ。」

「なっ！？これは！」

土郎さんの体が青い鎖によって縛られていた。

デイレイドバインド 特定空間に進入した対象を鎖で捕縛する設置型捕縛魔法だ。

「どうやらオレの負けの様だな。だがどういう事だ？見えなかったんだが？」

オレはバインドを解いて言った。

「さっきあなたはこれを見て、避けました。だから、見えない所に使ったんです。」

「なるほど、トラップだったのか。オレの後ろに使って、その後オレを誘導したんだな。だがいつ使った？最初の光る輪とさっきの光る球の時は分かったんだが。」

「木刀を投げた時ですよ。一瞬視線が逸れた瞬間に仕掛けました。」

そう、そのために木刀を投げたのだ。博打に近いリスクの高い選択だった。

だがオレにとっては問題無い、執務官は単独戦闘やリスクの高い選択を迫られる事も多い。だからそこで培った経験を生かした戦術こそがオレの最大の武器なのだから。

「そうか木刀を投げたのも、あの光る球も全てこのための布石だったとはな。オレの完敗だな。半分の力も出していないとはいえオレに勝つなんてな。」

信じられないといった顔で土郎さんは言った。あれで半分なんて有り得ない。

「あれで、手を抜いていたんですか！？いくら、満足に力を使えない状態とはいえ、あれだけオレを追い詰めておいて。」

もし本気を出されていたら一瞬で終わっていたんだろう。いくらなんでも規格外すぎる。この人に剣を習ったらオレも強くなれるのかな？そんな考えが頭をよぎった。

「君も全力では無かったのか。という事はお互いに全力で戦っていなかったという事だな。というかりヨウト君は何者だ？あんな不思議な能力が使えるなんて、人間離れしているよ。」

あれが不思議な能力程度の認識をしている土郎さんはホントに何者何だろう。オレは何度目か分からないがそう思った。

「それにあっさり対応した土郎さんも十分人間離れしてますよ。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

「ふ、はははははは」

オレ達は、顔を見合わせて笑った。オレは覚えていないが父親がいたらこんな感じだったのかな。ふとそんな事を思った。

その後、なのはがやって来て土郎さんが怒られていたのは余談である。

### 第三話 命の危機？（後書き）

戦闘パートがグダグダすぎる。

まさかこんなに難しいなんて。

## オリジナル設定

不破リョウト

14歳

ミッドチルダ式魔導師（無印後ベルカ式を訓練）

魔導ランク：A+

魔力量：S-（ロストロギアとの融合で増加）

魔力制御：AAA

瞬間出力：AAA

並列処理：S

先天的魔力変換資質 炎熱

後天的魔力変換資質 電気

時空管理局 執務官

レアスキル 魔術 魔術回路が30本あるが魔力生成量が極端に少ないため、リンカーコアの魔力を無理やり変換して使う必要がある。オードソックスな魔術は使えるようだが、詳細は不明。

魔術の行使の際は『アビリティ・オン』『アビリティ・オフ』という言葉を使う。

5年前にミッドチルダで倒れていた所を拾われた。それより前の記憶は殆どなくなっている。

名前は不破と書かれたネームプレートが辛うじて服に付いていたのと、リヨウトという名前は覚えていた事から、不破リヨウトとなった。

10歳から魔法を扱い始め13歳で執務官になるなどかなり優秀な魔導師である。Sランクの違法魔導師と戦闘し、逮捕したという実績もある。

彼が執務官となった理由はただ1つで、自分を拾ってくれた今は亡き人の様に、自分も誰かを助けたいと思っているからである。

体内のロストログアについては、不完全ながら融合しているため手が出せないが、機能停止しているので現時点では問題は無いと見られる。

使用魔法 捕縛系 フープバインド、デイレイドバインド、チェーンバインド

防御系 ラウンドシールド、プロテクション、バリアジヤケット、トライシールド

補助魔法 クイックムーブ、???

幻術魔法 フェイクシルエット

結界魔法 広域結界

攻撃魔法 ブレイズキャノン、ブレイクインパルス、ス  
ティンガーレイ、

フルバースト

ステインガースナイプ、ステインガーレイ・

ター、????、????

エクスプロード（広域殲滅）、ショートバス

・ブレイズキャノン、エクスプロードは炎熱変換を用いて使う

・ステインガーレイは普段は何も付与させないが、炎熱、電気を付与させて使う事が出来る。

・フルバーストのイメージは、フェイトのフォトンランサー・フアランクスシフト

アル

インテリジェントデバイス

ミッドチルダ式（ベルカ式としても使える様に設計されているが、現時点では不可）

AI 男性型

待機状態 カード

起動状態 杖

## 小太刀二刀（無印終了後の予定）

人体の詳しいスキャンが出来るなど高性能である事は分かっている。なお普通のデバイスに比べ思考が人間に近い。ベルカ式にも対応しているが開発の経緯などは不明。

## オリジナル設定（後書き）

こんな感じで進めていきたいと思っています。おかしな所はあまり気にしないでくださると幸いです。

書き始める前に詳しく作って置くべきだった・・・

## 第四話 決意

道場の入り口で土郎さんに聞いてみた。

「土郎さん。何でいきなりオレと戦ってみたいと思ったんですか？」

「そうだよ、お父さん。いくら事情があつたとしてもさっきまで倒れてたんだよ？」

なのはも同じ様に聞いた。

まあたぶん、なのはちゃんに関係してるのは間違いないだろう。オレはそう推測した。

「ああ、そのことだが、まずは先に謝っておこう。すまなかった。それと、詳しい話しは家族が揃ってからにしたいんだが構わないか？」

「そうですね。その方がいいですね。じゃ、とりあえず部屋に戻ってます。」

そう言つて部屋に戻つた。とりあえず待つことにしよう。その間にいろいろと確認もしなきゃいけない。

「アル損傷の方は平気か？」

一応念話を使ってアルと話す。こっちの方がアルの負担も小さくなるからな。自己修復では限界があるから、あまりダメージが酷いと不味い。ここじゃ、本格的なメンテナンスが出来ない。

「はい、なんとか。丸一日くらい直るでしょう。」

衝撃が来る技食らったから心配してたんだけど良かった。流石にアル無しで魔導師と戦うの無理がある。

「ホントは最初の一撃で決めるつもりだったんだけどな。まさか魔法も使わず、バインドを避けるとは思わなかった。」

「人間のスピードとは思えません。それに、私もオーバーヒートしかけてましたから、2発目が使えたのは、幸いでしたね。」

デイレイドバインドが発動しなかったら負けてたな。

「しかもアルなしとはいえ、木刀でステインガレーを叩き落す人とかそんなの初めてだ。まあ、最初のですでに異常だったから、効かないと判断してたけど、正解だったな。」

そんな風にさっきの戦闘を思い返していた。さっきの衝撃が来る技といい、防御を抜けてくる技といい  
明らかに普通じゃない。もしかしたら、オレが知らない魔法でも使っているのかも知れない。

「・・・ト君」

それにオレの名前でも驚いてたな。なにか高町家と関わりでもあったのかな？考え始めたらきりが無い。

「・・・ウト君」

まあ、今考えるべきは魔法の事の説明だなやっぱり実演するのが手  
っ取り早いな。本当はあまり教えるべきじゃないんだが、なのはの  
事や、オレの事についても説明しなくちゃならないからな。教える  
しかないだろう。

「リョウト君<sup>さん</sup>！」

「うわ！いい、いつ入ってきたの？」

なのはとユーノがオレの目の前に立っていきなり大きい声で話しか  
けて来た。何時の間に入ってきたんだろう？

「さっきだよ。リョウト君、さっきから話しかけてるのに全然気づ  
かないんだもん」

そうかそれは悪いことをしたな。でも、そんなに集中してたのかな  
？オレ。

「そっか、悪かったな。で、どうしたんだ？」

「お母さん達が帰って来たから呼びに来たの。」

「よし、じゃあ行くとしますか。」

オレ達はリビングに向かった。

リビングに行くのをそこには、土郎さんの他に3人の人がいた。

「長男の高町恭也だ。よろしく。」

士郎さんとそっくりな人が挨拶してきた。この人も雰囲気が只者じゃない。それにしても、士郎さんはいったい何歳だ？

「初めまして、長女の高町美由紀です。よろしく。」

眼鏡を掛けた女性が挨拶してきた。この人も同じ様に剣術を習っているのだらう。

「初めまして、妻の高町桃子です。よろしくね」

なのはに似た女性が挨拶してきた。ちょっと待て？この人が奥さんだと？士郎さんもそうだが、いくらなんでも若すぎるだらう。少なくとも40歳くらいのはずなのに。

そんな事を考えつつもオレも挨拶をした。

「初めまして、不破リョウトです。宜しく願いします。」

「「「！？」」」

桃子さん達がオレの名前を聞いて驚いた。やっぱりオレの事を知っているのかな。

「その話は後だ。今はなのはに連れて来られた経緯聞くのが先だろつ。」

士郎さんがさういうと、恭也さん何か言いたそうな顔をしていたが渋々引き下がった。

気になるが、今は士郎さんの言うとおりにする方がいいだらう。

「そうですね。じゃあ口で言っても信じてもらえないかもしれないんでまず見せる事にします。まあ士郎さんはもう見てますけど。」

ステインガーレイ、そう言つとオレの手の平に青い球体が出てきた。

「「えっ!?!」」

「これは!?!」

流石に士郎さんの時みたいないな反応じゃないな。まあ逆に士郎さんの反応の小ささの方が異常なんだけど・・・

「なのは、ユーノ。流石に話さない訳にはいかないからな。不満もあると思うが、今は黙っておいてくれると助かる。」

「・・・分かりました」

「でも、ジュエルシードの事は私達が話すよ。いい?」

「ああ、元からそのつもりだ。」

ここで念話をやめて、オレは本題に移った。

「これは魔法と呼ばれるものです。オレだけでなくそこにいる、なのはとユーノも使う事が出来ます。」

「魔法!?!それをなのはが使えるなんて・・・それにユーノが使えるって?」

美由紀さんが驚いた後、ユーノが使える事について聞いてきた。まあ、ユーノが人間だということ事を知らないんだし普通の反応だろう。それにしてもこの家族は凄いな。普通はもっと動揺とかするはずなのに。

「ユーノ、変身魔法を解いてくれないか？」

「分かりました。」

そういつて、ユーノはなのと同じくらいの少年の姿に変わった。流石にこれは士郎さんも驚きを隠せないみたいだ。

「今まで黙っててすいません。でも魔法の事については話すわけにいかなくて・・・」

「・・・驚いたがその事については後にしよう。リョウト君続きを頼む。」

「はい。この世界にはここ地球だけでなく様々な世界が存在しています。それらを統合して次元世界と呼んでいます。まあ簡単に言うると次元世界は宇宙の様な物ですね。そしてこの世界の事をオレ達は第97管理外世界と言われています。」

「第97管理外世界？」

「オレは時空管理局というに勤めています。時空管理局は警察と裁判所が一緒になった様な所で、数多くの世界を管理し、運営・維持しています。それで管理している世界を管理世界、そうでない世界を管理外世界と呼んでいます。ここは97個目という事です。」

「そんな事が．．．いや魔法があるくらいなのだからおかしく無いか。」

続きを話しても大丈夫そうだな。

「管理世界に多くには魔法を使う事の出来る魔導師がいます。魔導師には誰にでもなれるわけではなく才能によって大きく力が変化します。ちなみにこの世界には使う事の出来る人間は殆どいません。ですが、稀にそういった世界に稀有な才能を持った人もいます。なのはがそうです。」

「そうですね。ここで魔法について説明しておきましょう。士郎さんは実際に体験したから分かると思いますが、魔法は皆さんがイメージしている様なファンタジーなものじゃありません。」

「どうということなの？」

桃子の疑問はもつともだろう。最初オレが聞いたときも、もつとファンタジーの様な事を想像した。

「オレ達の使う魔法はデバイスという機器を通して発動させるのが基本です。そして、言ってみれば、魔法は銃などと一緒にです。もちろん盾を作ったり、人を癒す事も出来ます。でも基本的には争いの道具です。ただ魔法という物を使っているというだけで、銃や剣と大差ありません。オレだって人を殺した事があります。」

殺したくて殺した訳じゃない。でも、多くの人を命を助けるには殺すしかなかった。でもオレは、その選択を一生後悔し続けるだろう。きつと殺さずに助ける方法もあったはずだから．．．

止めよう。今はそんな事考えてる場合じゃない。

「そんな!？」

「じゃあなのはも人を殺したりするかもしれないの!？」

「...」

「なのはがそんな物を!」

桃子さんや美由紀さん、恭也さんの反応は当たり前だろう。だれだって、自分の家族に人を殺してほしくなんて無いだろう。土郎さんも落ち着いてはいる様に見えるが、内心は別だろう。

「でも普通ならそんなに心配要りません。魔法には非殺傷設定というものがあつて、それさえ使つていれば人を殺す事はありません。なのはは優秀な様ですしね。話を戻します。オレは此处に来る前、任 務でロストロギアの回収をしました。」

「そうか、少し安心したよ。それと、ロストロギア？」

「ロストロギアとは昔、文明が発達し過ぎて崩壊していった世界が残した遺産の事です。それらは危険な物の場合が多くて、それを回収するのも管理局の仕事の一つなんです。それでオレが回収していた ロストロギアが暴走してしまって、気がついたら此处にいたんです。オレからはこんな所です。」

後は、なのはやユーノが話すべきだろう。オレは黙って聞くことにしよう。

## ユーノ side

リョウトさんの話しが終わった。だったら次は僕の番だ。

「次は僕が話します。僕はこの世界の人間じゃなくてスクライアという、遺跡発掘を仕事としている民族の人間です。僕はある遺跡でジュエルシードと呼ばれるロストログアを発掘しました。でも、それを運んでいた船が何者か襲撃され、21個のジュエルシードがこの町に落ちてしまったんです。」

士郎さん達は黙って聞いてくれている。元はといえば僕の所為でなのは巻き込んだのだから、しっかり説明して謝らないと。

「それで、僕が責任を取るために回収しに来たんですけど、発動してしまったジュエルシードの力は強大で封印出来ずに怪我をしてしまった。その時になのはに助けてもらったんです。それから、回収に協力してもらっています。だから、なのはを巻き込んだの僕なんです。本当にすみません！」

「ユーノ君は悪くないよ！私もジュエルシードを集めたいと思ってるから集めてるんだよ！だからユーノ君は悪く無いよ！」

なのは……。でも、僕がなのはを巻き込んだ事に変わりはないんだ。もしかしたら、殴られるかもしれない。でも、それは当たり前だ。それだけの事を僕はしたんだから。

そう思っていたら、不意に頭を撫でられた。なんで？僕はなのはを……

「ユーノ、そんなに自分を責めるな。この町にそのジュエルシード？が落ちたのは君の所為じゃない。それに、君は確かになのは巻き込んだかもしれないが、それは仕方の無い事だったのだろう。なのは頑固だから一回言い出したら聞かないから、途中止める事も無いだろうしな。」

士郎さんは笑って、リョウトさんと同じ事を言っていた。他の人たちも同じように言い僕を責める事は無かった。

「ありがとうございます！」

思わず僕は、お礼を言いながら泣いてしまった。でも、そのくらいこの人たちは暖かかった。僕にも両親がいたとしたらこんな感じだったのかな・・・

士郎さんは泣き終わるまで頭を撫でていてくれた。

僕は絶対になのはを守ってみせる。この人達の優しさに応えるためにも。

なのはside

ユーノ君のお話も終わった。次は私の番だ。

「お父さん、お母さん。お願いがあるの。」

「なんだ？」

「言ってみて？」

「うん。私、このままジュエルシードを探したいんだ。」

絶対反対されるだろうな。でも、止めるわけにはいかないんだ。

「どうしてだ？リョウト君も居るしなのはが探さなくても良いんだぞ？それに危険な事もあるんだ。怪我をしてしまつかもしれない。」

「そうよ。私達はなのはに危険な事をしてほしくない。」

お父さん、お母さんは私の事を心配してくれている。もちろん、お兄ちゃんとお姉ちゃんも。でもっ

「それでも私は探したい。私達以外にも探してる子がいるの。その子はとっても寂しい目をしてた。その子とまだちゃんとお話しない。だから、危なくてもいい！このまま、あの子と話さずに終わりなんて嫌だから！」

そう、まだあの子の事何も知らない。まだ友達にもなっていないのにもう会えないなんて嫌だ！

「・・・分かった。ただし絶対無事に家に帰って来るんだぞ。それとリョウト君、ユーノ、娘の事を頼めるか。見て分かる通り頑固だからなあ。君達に守ってやってほしい。」

「私からもお願いするわ。」

ありがとうお父さん、おかあさん。でも頑固って言うのはちょっと止めてほしいの。

「父さん、母さん!？」

「恭也。なのは自分の意思と覚悟を持って決めたんだ。ならオレ達  
がやるべき事はそれを笑って送り出してやる事だ。分かるな。」

「・・・なのは気を付けろよ。オレからもお願いだ。リョウト、ユ  
ーノ、なのはを頼む。」

お兄ちゃんも、ありがとう。

「はい!絶対なのはを守ります!」

「時空管理局 執務官として、なのはを守ります。それに、此処ま  
で運んでもらった恩もありますしね。」

「お姉ちゃん達はあんまり力になれないかもしれないけど、いつで  
も頼っていいんだからね。」

「ありがとう!お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん!リ  
ョウト君、ユーノ君、一緒に頑張ろう!」

きつと、またフェイトちゃんと戦う事になるんだと思うし、もっ  
と危険な事も起こるかも知れない。でも、お父さん達も心配してく  
れてるし、リョウト君とユーノ君も一緒に居る。だから、きつと大  
丈夫だ。

私はもう一人じゃないんだから!

#### 第四話 決意（後書き）

ユートの姿の事はなのは知ってるという設定です。

次はリョウトの事についての話しにしたいと思っています。

## 第五話 眞実そして新しい家族？（前書き）

相変わらず駄文ですが、良かったら見てください。

少し修正しました。

## 第五話 真実そして新しい家族？

なのはとユーノは自分の部屋へと戻って行った。オレはリビングに残っている。

まだオレ達の事情を話したただけだ。

そう、今度はオレが話してもらう番だ。何故、士郎さんは戦いを仕掛けて来たのか。

そして、オレについて何を知っているのかを。

士郎さん達も、その事を分かっているみたいだしな。

「まずはオレの一族の事についてから話さなければならぬ。」

士郎が話し始めた。それにしても

「士郎さんの一族？」

「ああ、オレの一族は代々ある古武術を受け継いでいるんだ。その中でもオレが使うのは、永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術（以下御神流）という。まあ、オレは分家の人間なんだがな。」

確かにそっきの戦いの前にそういつてたな。しかも、分家があるという事はそれなりの歴史ある家系なんだろう。だけど、それがオレに何の関係が？

士郎さんは話しを続ける。

「あれは12年前の事だった。あるテロ組織がテロを起こして御

神の宗家は壊滅してしまった。オレは運よくそこにいなかったが、一族の殆どの人間が死んでしまった。残っている御神の剣士は5人も居ないだろう。」

「でも、それがオレに何の関係が？」

「・・・テロが起こった時、そこには大人達に混ざって9歳の少年が居た。そして、御神の一族の名字は不破という。ここまで言えば、だいだいの事は分かるだろう。」

士郎さんの一族の名字が不破！？もしかしてその少年って！？なるほど、オレの名前を聞いて驚いたのはそういう事だったのか。

でも、おかしい。オレが拾われたの5年前だし、そもそも場所が違いすぎる。オレが拾われたのは、ミッドチルダだ。普通に考えたら有り得る筈がない。

・・・だけど、1つだけ可能性がある。もし、爆弾テロじゃなくてそれが、ロストログアだったら、可能性はある。

でも、それこそ有り得ない筈なのだ。この世界は、管理外世界なのだから。

オレは自分の考えを必死に振り払った。だけど、士郎さんはそれを許さなかった。

「その少年の名は、不破遼斗という。そう、君はその時、死んだと思われていたんだ。さつき、テロで壊滅したと言ったが、跡形も無く吹き飛んでいてから遺体の確認が取れなかった。それほど、大きな爆弾が使われたというのが警察の見解だった。だが、その現場

には不自然な事が多かった。それに、警察もすぐに現場検証を止めてしまったしな。」

「．．．不自然な事？」

名前まで一致してしまうと、流石に認めざるを得ない。たぶん、それがオレだって言うのは間違いないんだろう。

それでも、年代に開きがある。だけどそれは、土郎さんが言った内容によつては、辻褄があつてしまう。

「ああ、爆弾が使われたにしては残留物が少なかったし、地面が綺麗に抉り取られてしまった様な部分もあった。テロ組織が、そんな大きな爆弾を用意出来たとは思えないく、仮に用意出来たとしても、あんな風に成る筈が無い。そう思つて警察に言つてはみたが、断固として取り合つてくれなかった。」

やっぱりオレの思ったとおりだ。これで全部繋がった。不自然な事の原因も、警察が早々に結論を出したのも、こう考えれば、全て辻褄が合う。

オレは土郎さん達に自分の考えを話す事にした。

「たぶん、使われたのは爆弾では無くロストログアだったのでしよう。抉り取られた様な所を中心に発動したんだと思います。警察が現場検証をすぐに止めたのは、時空管理局の方から何か圧力でも掛かったんでしょう。ロストログアが関わつてるとなれば、干渉してきてもおかしくありませんし。」

そう、それしか考えられない。管理局の事はよく知ってる。

「管理局に勤めている君が言うんだ。きっと、そうなんだろう。だが、そうだとでもおかしい。そうしたら、君は死んでいる筈だし、君自身も5年前に拾われたといっていたじゃないか。」

「それについても説明できます。たぶん、オレは発動の中心に居たんでしょう。そのロストロギアの本来の用途は知りませんが、次元震を起こし、世界に歪みを作ったんでしょう。ああ、次元震というのはロストロギアなどが引き起こす災害の事で、大きい物になれば世界を滅ぼす事もあります。」

話を戻しますが、稀にそういった物に巻き込まれて、世界を移動してしまう事があります。オレの場合は使われたロストロギアに特殊な能力でもあって、時間さえも超えてしまったんでしょう。過去にそういった事例も報告されています。」

時を越えるなんて事、事例として報告されても有り得ないと思っただけ、実際起こってしまったんだから信じるしかないだろう。

士郎さん達は驚いている様だ。まあ、オレ自身信じてなかったし、魔法を知ってすぐそんな事を言われても信じがたいだろう。

今まで黙っていた桃子さんが口を開いた。

「信じがたい話だけど、事実なんでしょうね。もう、魔法も見ちゃったしね。でも、これからどうするの？すぐに帰るの？」

桃子さんは少し微笑んだ後、これからの事を聞いてきた。それはまだオレ自身考え中なので、なんとも言えない。そもそもオレには帰るべき家も、待っていてくれる様な家族も居ない。

それに、士郎さんにはもう1つ聞きたい事がある。

「そのことなんですが、いろいろあつて直ぐには帰れないんですよ。家族もいませんから、急ぐ必要ありませんし。それに、士郎さんにもう一つ聞きたい事があるんです。」

「さっき戦いを仕掛けた事についてだろう。」

そう、なんとなくは分かつてるが、しっかり聞いて置かないと。

その、士郎さんの発言に、恭也さんと美由紀さんが声を上げた。

「お父さん！そんな事をしたの！？」

「戦いを仕掛けるなんて、何を考えているんですか！？（言ってくれれば俺が・・・）」

なにか恭也さんが言っていたが、戦闘狂なのか？

いや、オレの聞き間違いだろう。そうであつてほしい。

「ああ、その事は本当に悪かった。でも、確かめたい事があつたんだ。」

「確かめたい事？」

「1つは、君がオレの知っている遼斗君かどうか確かめたかったんだ。御神の人間ならそれなりの動きは出来るはずだからな。そして、もう1つは、なのはの事だ。なのはが何か危険な事をしているのは薄々気づいていた。そして、なのはは君を連れてきた。だから、

なのはと関係しているであろう君の実力を見たかったんだ。もし、何かあった時にはのを守ってくれるほどの力を持っているのかどうかを……」

やっぱりそうだったのか。子どもが何かしているのを親が気づかない訳ないし、オレがなのはと何かしていると思うのは普通だろう。まあ、実際は違ったんだけど。

「理由は分かりました。オレの正体についてはもう分かりましたし、実力の方も合格って事でいいでんすよね？」

「ああ。君だったらをなのはを任せられる。それに御神の剣士が全力を出す事が出来るのは誰か守っている時だ。君も、いやリヨウトもいくら記憶が無いとしても不破の人間だしな。」

士郎さんは笑ってそういった。君では無く呼び捨てで呼んだという事は一人の男として認められたのかな？そう思うと、少し嬉しくなった。

そして、少し照れた表情で士郎さんが言った。

「それとな？リヨウトが嫌じゃなかったらなんだが、オレの息子にならないか？もう家族はいないんだろう？」

「えっ？」

「そうね。リヨウト君なら大歓迎ね♪」

「私も賛成っ！」

「父さんが認めるくらいだしな。いいんじゃないか？」

「．．．ちよっ！！士郎さんは何を言い出すんだ！いきなり家族だなんて！」

他の人たちも！

それに、気持ちは嬉しいけど、会ったばかりのオレなんかが家族になるなんていろいろ迷惑がかかる。

「でも、オレなんかじゃ迷惑になりますし．．．」

「大丈夫だ。迷惑になんて思わないし、オレはリョウトの事をもう家族だと思ってる。皆もそうだろう？それに、今すぐに返事をしなくても構わない。」

士郎さんがそういうと、桃子さん達も笑って頷いていた。この人達はなんて優しく、暖かいんだろう。いくら自分達の親戚だからって、見ず知らずの人間を家族にならないかなんて、お人よしにも程がある。

それに今すぐに返事しなくても良いって、言ってくれてるしゆっくり考えても良いんだろう。

でも、もうオレの心は決まった。

「．．．ありがとう、ございますっ！えと、父さん、母さん、兄さん、姉さんって呼んでもいいですか？」

「ああ勿論だ！宜しくなりョウト！」

「これから宜しくね！リヨウト」

「宜しくな！リヨウト！」

「よろしく！リヨウちゃん！」

オレは管理局に入った事、そしてロストロギアが暴走した事に感謝しよう。

だって、そのお陰で、オレは高町家の一員に、家族になる事ができたのだから！

後である人にも伝えておこう。いろいろとお世話になったし。

あ、でも・・・

「なのはにも早速言っておかないとな！きっと喜ぶと思うぞー！」

士郎さん・・・

なのは無しで決めちゃって良かったんですか？

## 第五話 真実そして新しい家族？（後書き）

良かったら次も見ただけなら幸いです。

次は御神流についてと、日常についてにしたいと思っています。

第六話 動き出す物語（前書き）

今回は短いです。

## 第六話 動き出す物語

夕食の後、高町家の道場には今、4人の人間が居る。

御神の剣を受け継いでいる、高町 士郎・恭也・美由紀の三人だ。彼らは、一人の少年に問いかける。

「リョウト、御神の剣を学びたい理由はなんだ？魔法を使えるだろう。」

そう、彼は御神の剣を学ぼうとしている。

「自分が不破の一族だからと言うのは止めたほうが良い、そんなに生半可なものじゃない。」

「そうだよ、リョウちゃん。私が言うのもなんだけど魔法？と違って命の取り合いになるんだから。」

3人は真剣な表情で、自分に問いかける。剣を学んで得た力で何をするつもりなのか？覚悟は出来ているのか？

暗にそういった意味を含んだ言葉だと分かった。

「オレは今までたくさんの任務をこなして来ました。そして、たくさん命を救う事が出来ました。でも、助ける事が出来なかった人達が居た。」

もし、あの時に自分に力があれば助ける事が出来たかもしれない。それは、過去の事だからどうしようもない。でも、未来なら変える事が出来る。

そのために力が欲しいんです。」

それは偽善だつて事ぐらい執務官になる前から分かっていた。不幸があるからこそ幸福がある、これは変える事はきつと出来ないのだろう。

でも、せめて自分の手の届く範囲は幸せで、生きていてほしい。

例えそれが、管理局の理念に反する事をする事になつてもこの決意は変わらない。

「そうか、もう一つ聞こう。お前は、人を殺す覚悟と人を守り抜きのために死ぬ覚悟があるか？」

「オレは、まだ自分人を殺す覚悟があるとは思いません。それに、もし誰かを守りきつたとしても、自分が死んでその人や他の人達が悲しんでしまったら守つたとは言えないと思うんです。だからオレは、人を殺す覚悟、人を守り抜く覚悟、そして絶対に生き残る覚悟を持ちたいと思います。」

場が沈黙につつまれる。

オレは偉そうな事を言つてしまつて冷や汗が止まらない。

3人は何も言わずオレの事をじつと見ている。口では何とでも言える、といった様な視線にリョウトは自然と表情が沈む。

だが、その目には確固とした強い意思があつた。

「よし、合格だ！」

「えっ？」

先ほどの態度がまるで嘘だったかの様に話す士郎さんに、オレは困惑する。

「悪かったな、リョウトを試していたんだ。お前が御神の剣を振るうに相応しい人間かどうかを。」

「ごめんね。リョウちゃんを信用してない訳じゃ無かったんだけど、事が事だからね。」

済まなそうに恭也と美由紀は謝る。

そう彼らは試していたのだ。人柄からして何か不純な動機があるとは思っていなかった。

だが、リョウトの事を個人としては認めるのと、剣士として認めるのは別の話だからだ。

「正直、お前が覚悟は出来ているなんて事を言ったら迷わず不合格にした。」

でも、安心したよ。リョウトなら御神の剣を振るうに値する。」

「ありがとうございます！これからお願いします、し、父さん、兄さん、姉さん！」

「途中でへばって止めるなよ。」

「一緒に頑張ろ！」

「ああ、よろしくな。まあ今日はもう遅いしまた明日からだな。朝早いから寝坊するなよ？」

士郎は笑いながらそういった。

居候して、剣まで教わるなんて迷惑をかけっぱなしだが、少しずつ恩返しを出来る様にしよう。

今は、なのはを絶対に守るんだ。

リョウトは改めてそう決意をした。

なのはは突然の出来事に混乱している。

男の子が倒れていたのは理由も分かったし、なんとか落ち着く事が出来た。

でも、突然魔法の事を家族に話す事になり、その後に、その子を家族にすると両親から聞いては流石に混乱する。

そうする事になった理由も大体は聞いたし（かなり簡単にだが）別に嫌では無かったから賛成はしたし、むしろ嬉しいくらいだった。でも、さっきまでは赤の他人だった人がいきなり兄になったと言われても、いまいちピンと来ないのだ。

結局何が良いたいかと言うと・・・

「なんて呼べば良いんだろう？リョウト君？それともお兄ちゃん？  
うーん、ユーノ君どう思う？」

「どっちでも、なのはの好きな方で良いんじゃないかな？」

他の家族と同じく高町なのはも順応性が高いという事である。

この後、リョウトの事をお兄ちゃんと言い、リョウトが恭也に殺されそうになったのはまた別のお話。

同日 同時刻 次元空間内。

時空管理局 次元空間航行艦船『アースラ』

「みんなどう？今回の旅は順調？」

緑色の長い髪の女性が艦長席から部下に話しかけている。

この人が『アースラ』の艦長なのだろう。

「はい、現在は第3船速で航行中です。目標地点には今からおよそ16時間後に到達予定です。前回の小規模次元震以来、特に目立つ

た動きはありませんが二組の搜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね。」

「そう。」

部下の報告を聞いて何か思う所があったのか、少し声のトーンが落ちた。

「失礼します、リンディ艦長。」

ドアが開き、ブリッジに一人の少女がお茶を持ってきてリンディ艦長と呼ばれた女性に渡す。

お茶の中身は緑茶だったのだが、何故緑茶があるのかというのは気にしてはいけない。

「ありがとね、エイミィ。」

この艦長席に座っている女性は時空管理局提督『アースラ』艦長リンディ・ハラオウン。

お茶を渡した高校生くらいの少女は時空管理局通信主任兼執務官補佐で、アースラの管制官 エイミィ・リミエツタだ。

「そうねえ、小規模とはいえ次元震の発生は、ちょっと厄介だね。危なくなったら直ぐに現場に向かって貰わないと。」

ねっ？クロノ。」

リンディはお茶を飲みながら、ブリッジにいる一人の少年の名前を呼んだ。

「大丈夫、分かってますよ、艦長。僕はそのためにいるんですから。」

黒髪の10歳くらいの少年（実際は14歳で小さい事を気にしているのだが）。アースラ所属の時空管理局執務官でリンディの息子クロノ・ハラオウンはそれに応えた。

## 第六話 動き出す物語（後書き）

遂に管理局が動き始めました。

今回は、御神の鍛錬、魔術の確認、デバイスの修理状況などを書きたいと思っています。

後、文章の書き方が変わっていきますが下手になっていく事はないと思います。

## 第七話 新たな出会い 前編（前書き）

相変わらず駄文ですけど、良かったら見てください。

## 第七話 新たな出会い 前編

高町家の朝は基本早い。

士郎、恭也、美由紀の三人は朝の鍛錬があるし、桃子も自営業の喫茶『翠屋』の準備もあつたりするので早く起きる。なのはは寝ているのだが……

そして、今日から御神の剣を学ぶ事になったリョウトも当然早く起きた。

「あれ？ここは？……そうか今は高町家に居るんだっとな」

一瞬見慣れない部屋に戸惑ったがすぐに頭が覚醒し状況を理解した。

「おはようございます、マスター。」

「ああ、おはよう、アル。修理のほうは終わったか？」

「勿論です。ですが、一度フルメンテナンスをしないと不味いかもしれません。」

それについてはしょうがないだろう。ロストログアの暴走に巻き込まれて修復出来ただけでも運が良いのだ。

管理局の支給しているストレージデバイスではこうは行かなかっただろう。

それに、最近はかなり酷使していたのでちゃんと整備してやりた

いとは思っているのだが此処では無理なのだ。

「まあ管理局が来るのを待つしかないな。じゃ行くぞ。」

「了解。」

リョウトはアルに格納してあったトレーニングウェアに着替えて道場に向かう。

今日が初めての鍛錬なのだ。最初が肝心なのだからと思い、リョウトは気合を入れた。

「おはようございます、父さん。」

「おはよう、リョウト。早速始めようと思うんだが良いか？」

その言葉を聞いてオレは気を引き締めた。最初なのだからいきなり本格的な事をするとは思えないが、それでもだ。

それだけ、剣を振るう事は危険な事だからだ。

「勿論です。」

「とりあえず簡単に準備運動をしておこう。」

そして、ランニングしたり体をほぐし終わった所で本格的な事をするようだ。

「よし、それじゃ今から幾つか型を見せるからそれを真似してみてくれ。」

そういつて父さんは木刀を二つ持ち振るい始める。

改めてみると、父さんの剣筋は洗練されていて、素人目でも相当の使い手である事が分かった。

少しの間見惚れていたが、父さんのが終わったのを見てオレも木刀を構えた。

同じ様に動いているつもりでも父さんのと比べると雲泥の差だ。

それを父さんは黙って見ている。

「すみません、今まで剣を振るった事はあまり無くて・・・」

「いや驚いたよ。初めてにしてはかなり出来ている。やっぱり記憶は無くても体は覚えているみたいだな。とりあえず今日は、今の型を繰り返してやってみるとしよう。最低限は出来ているみたいだからな。まったく、嬉しい誤算だよ。」

そう、士郎は黙っていたのではなく驚いていたのだった。リョウトは自分のはまったく出来ていないと思っていたが、それは士郎から見てみると明らかに素人の動きでは無いのだ。

これは鍛えればオレを超えるのにそんなに時間は掛からないだろうと士郎は確信した。

「はい！」

そしてそれから1時間、鍛錬は続いた。

鍛錬も終わりリビングに戻ってくると桃子母さんに頼まれた。

「ごめんねえ。なのは起こしてきてくれないかしら？」

「ええ、構いませんよ。」

断る理由もないから起こしに行くでしょう。

他の人は起きてるのになのはだけ起きてないって何かアレだな。

コンコン。

ノックを試みたが返事は無い。

「なのは？入るぞ。」

「なのは起きて！朝だよ。あ、リョウトさんおはようございます。」

「

部屋に入るとユーノがなのはを起こしているのが分かった。

フェレットが喋りながら起こそうとしている姿はシュールすぎるな。

「ああ、おはようユーノ。ホントに朝弱いんだな、なのはは。他の人達は早起きなのに。」

可愛らしい顔で眠っている。とても魔導師として戦っている様に見える。

個人的にはさっさとそんな日常からは離れて欲しいと思うんだけどな。

オレとユーノが話しているとやっと目が覚めて来た様だ。

「ふぁあゝ。ユーノ君おはよう。」

どうやらオレの事は気づいてないみたいだ。  
ここは黙って置く事にしよう。

「おはよう、なのは。」

「．．．！？リヨ、リヨウト君！？な、なんで此処に！？」

「おはよう、なのは。お前を起こしに来たんだよ。それにしても  
オレが入って来ても起きないなんて本当に朝弱いな、なのはは。」

「も、もしかして私の寝顔．．．見た？」

「ああ、可愛い寝顔だったな。」

オレは素直に答えた。

別にオレはロリコンじゃないぞ！勘違いするなよ！

「っ／／」

なのはは顔が真っ赤になってる。そんなに恥ずかしかったのかな？  
今度からは気を付ける様にしよう。

「オレは先に下行ってるから早く来いよ？」

そう言ってオレは部屋を出た。

その後、赤い顔でオレを見るのはを見た、父さんと兄さんに殺気を当てられた。

勘弁してほしい。

オレはこれから何をしようかと考えている。

今はもう朝の9時を過ぎ、家には自分しか残っていない。鍛錬はするなと父さんに言われているし、翠屋の手伝いも断られてしまった。

そんな風に考えているとアルから話しかけられた。

「マスター、魔術回路についての確認したのですがよろしいですか？」

「そうか、まだ説明してなかったな。魔術回路はそれに魔力を通す事で魔術を発動させる物なんだ。魔術回路はイメージとしてはリンカーコアとデバイスを一緒にしたような感じだな。」

「？魔術と魔法はどう違うのですか？」

「オレ達の使う魔法は簡単に言ったら科学と一緒にだろ？でも、魔術はそれとは逆で、例えば相手に呪いをかけたり霊を呼び出したり、そういった神秘的な物なんだ。まあ魔法と同じ様な物も当然あるけどな。」

オレ達の使っている魔法は言ってみれば石油が魔力に変わっただけ

けで科学と言っても差し支えない物だ。その反対で、魔術は魔法からしてみればオカルトと呼んでもおかしくない。力の方向性がまったく違うんだ。

「デバイスの私からして見ると、信じがたい話ですね。マスターは使う事が出来るのですか？」

「使い方も経験として体に刷り込まれたみたいだからな。簡単な物は使えるよ、でもかなり辛いんだよな。魔法と違ってかなり痛みもあるし、発動もミスれば即、死に繋がる。まあでも、実際使ってみないと分からないからな、やってみるか。」

本来ならいきなり使える様な生易しいものじゃないみたいだけど、今のオレは使う事が出来る。

目を閉じて体の中のスイッチの様な物を切り替える。

「『強化、開始』」  
アクティブ・オン

1本の魔術回路に魔力を通し、右腕の構造を把握する。  
そして、さらにもう1本の魔術回路を起動させ構造を強化していく。

「っ！・・・ふう。アルをオレの右腕スキャンしてみてください」

とてもじゃないが、痛みと体の中に異物が入って行く様な感覚で乱用するのは無理だな。

それに、時間が掛かりすぎて今のままじゃ役に立たないだろう。

「了解・・・！かなり強度が上がっています、魔法じゃこの半分も

行かないでしょう。」

「そうか、剣も使う事になるだろうしこれを重点的に練習しておいた方が良いな。」

「そうか、成功していて良かった。使うのは初めてだったからな。とりあえずはこんな感じでいいか？この一件が片付いたら詳しく調べようと思ってるんだけど。」

ロストロギアからの知識が断片的にしか入って来てないからな。

無限書庫とかに文献があるかも知れないけど、あそこは個人で捜索出来る様な所じゃない。

ロストロギアを頼るしかないだろう。

「はい十分です。ですが、リスクも高いみたいですから迂闊に使うのは危険でしょうから、使用する時はお気を付けて。」

「分かってるよ。よし、じゃあジュエルシードを探しに行くか。そのついでにこの町の事も把握するでしょう。」

「了解。」

広範囲探索は使えないがそれでも探さないよりは良いだろう。この世界や、この町の事も調べておきたい。昼は外で食べるようにしてお金も渡されたし、幸い時間はある。

行くつ、早くこの事件を終わらせる為に。

## 第七話 新たな出会い 前編（後書き）

魔術についてはその内詳しくわかってきます。

## 第八話 新たな出会い 後編

「さてと、この街について大体の事は調べられたしもう夕方だ。なのは達と合流するか？」

いろいろと調べているうちに大分時間が経っている事に気づいた。それもそのはずだ。リョウトは地図で見るだけでなく実際に歩いて地形を確認していたのだから。

「そうですね、そうするべきでしょう」

「よし、じゃあ・・・」

「リョウト君、ジュエルシード見つけたよ！」

念話をしようとした所で、なのはの方から念話が来た。どうやらジュエルシードを発見したらしい。

「分かった、場所は？」

「今、アルに送りました。僕達は先に向かいます」

「オレも直ぐに向かう、気をつけろよ」

予想以上に見つかるのが早い。発動していないのはそうそう見つかるものじゃないんだけど・・・

それに、なのは達が見つけたという事は、もう一人の魔導師も間違いなく気づいているだろう。

早く行かないとなのは達が危ないかもしれない。

「アル場所は分かるな？行くぞ！」

「了解！」

オレは直ぐにセットアップをし、認識阻害の魔法と飛行魔法を使ってジュエルシードの所に向かった。

遠くになのは達が見える。だけど他にも誰か居るようだ。

「なのはともう一人居るな。アレがもう一人の魔導師か？何処かで見た事がある様な・・・」

距離が遠いから良く分からないが会った事がある気がする。

「マスター、考えるのは後にしてください」

「そうだな」

アルに言われてやっと思考が戻って来た。そうだ、今はそれどころじゃない。

早くジュエルシードを回収しないと。

「なのは、状況はどうなってる？」

「リョウト君！今、フェイトちゃんと話し合おうとしてるんだけ

ど．．．」

「分かった、なのは好きな様にやってくれ。オレとユーノでフオーするから」

「僕とリョウトさんはアルフの相手をするよ。だから、なのはは Fayette と」

「ありがと。二人とも無茶しないでね？」

「それはこっちのセリフだ（よ）！」

ついユーノとハモってしまった。まったく、なのはどの口がそんな事を言うんだか。

どう考えても一番無茶して心配掛けてるのはなのはだろう、少し話を聞いただけでも分かるくらいだ。

念話を切り上げ、オレはなのは達の近くに降り立った。

「貴方はあの時の！？」

かなり困惑した様子でオレを見ている。

「その節はどうも、不破リョウトだ。君の名前は？」

「そっちの子から聞いていないんですか？」

「聞いてるけど、自己紹介は大切だろ？」

他人から聞くのでは無く、自己紹介をするのは当たり前だし、大

切な事だ。

この子にとっては違うのかもしれないけど。

「・・・フェイト・テストロッサです。」

「テストロッサ？もしかして、プレシアの？」

確かにあの人に似ている。それに、あの人に姉妹が居ると言うのは聞いたことがある。

だとすれば別に有り得ないと事じゃない。

「母さんを知ってるの!？」

「名前だけな。それと聞きたい事があるんだ。アリシアという人を知っているか？」

そう、普通に考えれば妹と考えるのが普通だろう。でも、それだとおかしいんだ。

アリシアさんは10年以上前にプレシアさんは亡くなったと言っていた。

でも、目の前の女の子はなのと同じくらいの年だ。

明らかに年が合わない。オレと同じようにロストログアで時間跳躍したのか？

でも、そんなの滅多にあることじゃない。

「アリ、シア?・・・知らない。でも、何処かで聞いた気がする?」

フェイトはアリシアさんの事を知らないみたいだ。やはり彼女の妹とは別人か？

でも、さっき母さんと言った。つまり、別人じゃない？

駄目だ、情報が足りない。

「フェイト！そんな奴の話なんて聞かなくていい！」

そういえばこいつ、前も勝手に人の話の邪魔したそうだ。

先にこいつ黙らせるか？

本気でそんな事を考える。

「・・・そうだね。ジュエルシールドは譲れないから。」

「私も譲れない。理由を聞きたいから、フェイトちゃんが何でジュエルシールドを集めてるのか。どうしてそんなに、寂しそうな目をしてるのか。私達が勝ったらお話聞かせてくれる？」

今まで黙っていたなのはがフェイトに向けて話し出す。普段だったらこんな事は許可しないだろうけど、恩もあるし何より今のオレは唯の一般人だ。止める必要は無い。

そして、なのはとフェイトはセットアップし戦闘に入る。

だが、その瞬間何者かが転移して来てオレ達の間割り込んで、なのは達とフェイト達にバインドを掛けた。

当然、オレは避けた。この程度でやられるのなら執務官になどな

っていない。

「そこまでだ！時空管理局 執務官 クロノ・ハラウンだ！さて、事情を聞かせてもらおうか」

やっと来たのか。随分と遅い対応だ、まあトップの人間共がアレじゃ仕方が無いか。

それよりも気になる事がある。

「えっ！」

なのは達は予想外の出来事に混乱している。

まあ小学生に冷静な対処を求めるのも酷な事だろう。

「それよりも、ハラウン？もしかして・・・」

いや、確かにあの人の面影はあるけど別人の可能性が高いだろう。

それはそれとして、なんで今日はこんなに知り合の関係者と会うんだろう。

運命と言えばそれで片付くのだろうけど、生憎そんな物信じてない。

そんな事を考えつつもマルチタスクを使って意識を目の前の光景にも向ける。

「管理局！フェイト、撤退するよ！」

そういつてアルフは執務官にむけてスフィアを放つ。執務官はシールドを張ろうとしたが拘束しているなのはに気づいてフィールドを張った。

その隙にフェイトがバインドを解いてジュエルシードへと向かっていくのが見えた。

それを後ろから撃とうとしている執務官の姿もだ。

「っち！アル！」

「quick move！」

執務官の直射弾がフェイトに迫る。そこに居る誰もが当たったと思った瞬間、それはリョウトの張ったシールドによって防がれていた。急場しのぎのシールドだったからか、一発が貫通していてバリアジャケットが一部焦げている。

執務官としてはオレの行動は間違っているだろう。でも、今のオレは次元漂流者の不破リョウトだ。

女の子が傷つくのを黙って見ている事なんて出来ない！

「君は！」

執務官がこっちを睨み付けて何か言っているようだが知ったことじゃない。

こちらに非はないし、むしろあるのは向こうだろう。そう考えたオレは、直ぐにフェイトの方を向いた。

「どうして、私を？あなたは敵なのに・・・」

「オレは君の敵になった覚えはないよ、それに目の前で誰かが傷つくのを見てるだけなんて嫌だったからな」

敵になった覚えなんてない。管理局に反する物は敵だと考えればフェイトは敵なのだろうが、生憎と非番な上、オレは管理局に所属してはいるが管理局が嫌いだ。

．．．特にあの上層部の連中は。

そう、リヨウトは知っているのだ。管理局の汚職と犯罪組織への癒着、そして最高評議会の実態を。

「．．．ありがとう」

フェイトはそういつてジュエルシードを回収しアルフと一緒に姿を消した。

結果的に逃がす手伝いをした事になるけど仕方ないだろう。

次に会った時に話し合えばいい訳だし、今は管理局への対処が最優先だ。

「お前、どういっつもりだ！なぜ邪魔をした！」

．．．執務官どのは随分とご立腹らしい。

「じゃあ、なんでお前は彼女を攻撃したんだ？」

「管理局員として当たり前の事をしただけだ」

管理局員として当たり前の事か。こいつは何か勘違いしている様だ。

「そうか。この世界の名前は何だったかな？オレの記憶では第97管理外世界だったと思うけど？管理外世界で管理局だと大きい顔をしても何の意味も無い。それに君を攻撃したのは、あの使い魔だ。それなのに少女に対して攻撃するなど正当防衛も成り立たない、傷害未遂罪にあたる。君も人を裁く側の人間なのだから、しっかりと法は守るべきだと思うが。．．．さて、何か反論は？」

そう、あくまで此処は管理外世界なのだ。時空管理局の法が適用されている訳じゃないから、さっきの執務官の行動はこの世界において犯罪行為でしかないのだ。

そのくらいの事、少し考えれば分かるはず。

「つく！」

流石に此処まで言って分からないほどじゃないらしい。  
一応、執務官らしいからな。

なのは達は呆氣にとられている様だ。まあ、普段こんな口で相手を言い負かす様な事をしてとは思えないし、たぶんされた経験も無いのだろう。

オレもした事しか無いが。

「貴方の負けよ、クロノ」

突然、画面にモニターが出てきた。映っているのは緑色の髪の子

性だ。

この人が責任者なのだろう。

「母さん！」

「時空管理局 アースラ艦長 リンディ・ハラウンです。こちらに非があった事は認めます。そういった話も含め事情を聞きたいのだけれど良いかしら？」

やっぱりこの人が艦長か。クロノ執務官に比べて頭も柔らかいらしい。

それよりも、あの人の言っていた通りの名前と見た目だな。これでもう別人という線は無くなった。

でも、もう会う事は出来ない場所に居るって言っていた気がするんだけど、どういう意味だったんだろ う？ 事実、オレは会えている訳だし……

一つ仮説はある。もし、オレの考えが正しかったら答えの半分くらいは出るだろうけど……

止めよう。今、フェイトの事やこの事を考えていても仕方が無い。

その事についても、話を聞けば何か分かるかも知れないし、向こうの案を呑むべきだろう。

「……そうですね、なのは達もそれで良いか？」

オレの求めている話と、リンディさんが求めている話はまったく違っていると思うけど。

「えっ？っ、うん」

「ぼ、僕も構いません」

なのは達は急な展開についていけないみたいだ。  
まあ、まだ9歳だし仕方ないだろう。

「それじゃあクロノ。アースラに案内して差し上げて？」

リンディさんはクロノにそう言いながら微笑む。

「・・・了解」

どうやら、執務官殿はまだ不満らしい。

まったく、母親のリンディさんを少しは見習ったほうがいい。

リョウトは心の底からそう思った。

そして、オレ達は執務官に連れられてアースラへ向かった。

## 第八話 新たな出会い 後編（後書き）

無理な設定などについては、次回分かるようにしたいと思います。

## お詫び

この小説を読んでくださりありがとうございます。

今回、重大な欠陥や文章がおかしいなどの理由から、この小説を凍結する事に決めました。

読んでくれた方は少ないと思いますが、お詫び申し上げます。

まったく別の作品を投稿する予定ですので、そちらも読んでいただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8197q/>

---

魔法少女リリカルなのは ～ I F の存在 ～

2011年3月24日13時37分発行